

# 諏訪小だより

令和4年2月28日  
3月号  
多摩市立諏訪小学校  
校長 齋藤 幸之介

## 3月だからこそ大切にしたいこと

校長 齋藤幸之介

2月は逃げる、3月は去る—こころばらくの時間の経過は特別に早く感じます。同時に、だからこそ忘れてはならないことがあるのでは、と振り返りたいとも思います。

私は、前任校でも3月の学校だよりに同じテーマで綴っており、今回も今までを踏まえてお伝えすることにいたしました。このことは、2月末から3月にかけての全校朝会の内容でもあります。「忘れてはならないこと」を訴えていきたいと思うのです。

### 東京も大きく揺れた東日本大震災

今から11年前の3月11日は小雪混じりの底冷えがする寒さでした。私は当時学級担任をしており、地震が発生したときには体育館でバスケットボールの授業をしていました。大きく揺れた体育館の梁の音に驚き、子供たちにマットを投げながら、この下に潜るように指示を出しました。あまりに甚大な被害であったのは言うまでもありません。

あれから毎年、この時期には必ず東日本大震災のことが新聞の中心となります。昨年、被災された岩田久美さんという方の記事を読みました(2021年3月7日、朝日新聞)。岩田さんは2012年にも紹介されています。被災後、岩田さんは、高校生になった息子さんの分と、両親を亡くした息子さんの同級生の分の二つの弁当を作り続けたそうです。当時の記事を読み、新潟県中越沖地震(2007年)で同じく被災した人や千葉県在住の人が米を届けてくれました。「もし私が亡くなったら、別のお母さんがそうしてくれたかもしれない」と息子さんたちが高校を卒業するまでお弁当づくりは続いたそうです。無我夢中で生きてきたけれど、この時期になるとあの日を思い出して「憂鬱になってしまう」という岩田さんの言葉から、被災をしたときの気持ちは簡単には癒えない、とあの日の恐ろしさを改めて感じます。11年前と言えば、今の5年生が生まれた頃でしょうか。子供たちの記憶にはないあの日を伝え、一人一人が自分の命を守る大切さを深く認識させなければ、と考えています。

### 「焼けあとのちかい」

残念ながらおよそ1年前に亡くなった作家の半藤一利さんは、さらにさかのぼること1年半ほど前に絵本「焼けあとのちかい」(2019年、大月書店)をかいています。のどかとも言える少年期、しかし、

1941年12月8日から世の中が大きく変わっていきます。この作品には、1945年3月10日未明、東京の下町を中心におびただしい数の焼夷弾が落とされた際の恐怖が描かれています。戦争が終わって「この世に「絶対」はない」ことを思い知らされた半藤さんの「どうしても伝えたいこと」、それは「戦争だけは「絶対に」はじめてはいけません」です。

タブレット端末越しとなりますが、私は子供たちに伝わるように、読み聞かせをしたいと思います。

### そして今、共に闘う子供たち

2年前の2月27日、当時の安倍晋三首相は、3月の修了式あるいは卒業式の前日まで全国の学校を休校としました。4月に入って入学式、始業式はありましたが、それからおよそ2ヶ月間休校が続きました。全国のどの学校も混乱しました。休校明けは分散登校となり、平常の教育活動はほとんど行われませんでした。子供たちの苦労は計り知れませんでした。保護者や御家族の方々、そして私共教職員も苦悩しながらの工夫を積み重ねてきました。それでも、新型コロナウイルスの驚異は収まることはなく、今では「オミクロン」さらには「ステルスオミクロン」などと言われる変異株も表れ、収束がなかなか見えなくあります。

しかし、子供たちは様々な制約を受け入れながらも日々学校にやってくる必死に生活をしています。以前のように行えない様々な活動にも必死に取り組み、成果が上がれば素直に喜ぶ姿に頭が下がります。

アメリカ合衆国で起こった同時多発テロは、人々を大いに失望させました。そのとき、当時国務長官であったコリン・パウエル氏はこう言います。「明けぬ夜はない」だから「何とかなる」。これを私は時々思い出しますが、最近はその際には私の前に本校の子供たちの姿があります。授業のとき、校庭を走り回っているとき、登下校中に友達と語り合っているとき……。そして、そんな子供たちはきっと未来に希望を見出しているのだろう、とそのたくましさに感激をしています。

3月は、過去に学び、今を生き、そして未来を考える一つの契機となるのでは、と思っておりますがいかがでしょうか。私も、微力ながらこれら子供たちに紹介していきたいと思っております。